

オンノー・クロップと  
『小ドイツ主義歴史観の創設者たち』

ハンス・シュミット  
梶原克彦 訳

## 翻 訳

# オンノー・クロップと 『小ドイツ主義歴史観の創設者たち』

ハンス・シュミット  
梶 原 克 彦 訳

\* 以下は、Hans Schmidt, *Onno Klopp und die „kleindeutschen Geschichtsbaumeister“*, in: Albert Portmann-Tinguely, *Kirche, Staat und katholische Wissenschaft in der Neuzeit: Festschrift für Heribert Raab zum 65. Geburtstag am 16. März 1988*, F. Schöningh, 1988, S. 381-395, の全訳である。〔 〕内は梶原による補足である。

オンノー・クロップのことが世間で取り沙汰されなくなったが、これは昨日や今日に始まったわけではない<sup>1)</sup>。確かに彼の手になるライブニッツ著作集は未だに研究上不可欠であり、17世紀末から18世紀初頭へかけての中欧史と西欧史に取り組む歴史家ならば、いずれも、クロップの『スチュアート家の没落 (*Der Fall des Hauses Stuart*)』や1683年のトルコによるウィーン包囲に関する著作を、これらで引用されている史料の点からしても、もちろん利用しない訳にはいかないし、クロップが編集した皇帝レオポルト1世とマルコ・ダヴィアーノ (Marco d'Aviano) 神父との往復書簡については言うまでもない<sup>2)</sup>。しかしこれらの作品の筆者は大多数の今日の歴史家たちにとってほとんど一行の価値もないようである。

1950年にフランツ・シュナーベルが、クロップの子ウィアールト・フォン・クロップの遺稿からその父の伝記を増補改訂版で編集して以来、この偉大な反対派にしてビスマルク批判者に関して何も根本的には変わっていない<sup>3)</sup>。シュナーベルが<sup>4)</sup> この伝記の序文で「クロップもその一人だった1866年の敗北者たちは実に様々な陣営に存在

したが、自由派、民主派、プロイセン保守派の意見によれば、今後も、大ドイツ主義的連邦主義者たちは欠けてはならないとされた。〔しかし〕我々の時代のビスマルク作品のいずれにおいても、すなわち A. O. マイヤー（Mayer）にあってもエーリッヒ・アイク（Erich Eyck）にあっても、彼らはもっぱら副次的にその価値を認められるにすぎない」と述べたとすれば、これは少なくともオンノー・クロップについては引き続きあてはまる。というのも、シュナーベルの門下生であるロタール・ガル<sup>5)</sup>あるいはアメリカ人オットー・プフランツェ<sup>6)</sup>の新たなビスマルク伝においても、クロップの名前はまたしても取り上げられていないからである。エルンスト・エンゲルベルク<sup>7)</sup>もクロップに注意を払っていない。

このシュナーベル-クロップの著作はずっと反響を呼ぶことはなく、おそらくは、この書物が模倣を許さない独特の作品であり、かの時代の特殊な雰囲気を支えられていた、戦後間もない時代にのみ登場しえた作品だからだろう。しかしその他の点についても理由がある。すなわち、オンノー・クロップは明らかに、あらゆる兎を追って一兎をも得ないこと甚だしく、一彼の存命中だけでなく一その結果、19世紀においてもなお彼に対して向けられた記憶の破壊が今日なお影響力を発揮し続けているからである。

そこで以下の詳述では、クロップの作品の重要な側面を明らかにしつつ、その明白な脆弱性にもかかわらず重要性を備えた歴史家への注意を特に喚起し、詳細にクロップと取り組むことを提唱する。それというのも、プロイセンのドイツ的使命の教説に対するクロップの異議、この国家の礼賛に対する彼の反対が、好戦的な東フリースラント人の作品においてライトモチーフをなしているからである。その普及者たちに対する論戦、すなわち、ホイサー（Häußer）、ジーベル、ドロイゼン、そしてクロップ自身、スイス人ブルンチュリとレオポルト・フォン・ランケをそうした人物群とみなしたが<sup>8)</sup>、クロップはトライチュケの名前を挙げないと思われるが、おそらくそれは単にトライチュケがウィーン会議以降の19世紀ドイツ史と取り組んでいたからである―何よりもこのような人々への論戦で、クロップは彼らの恨みを買った。それは、その論戦が折に触れて、反感と嫌悪に支えられて、度を越したものだからである。クロップ自身、この論戦を単に学術的に受け止めていたわけではなかったのである<sup>9)</sup>。

もちろん、彼はこれらの人々を「なにもプラスなもの」を生み出していないから、

と特に評価すらしなかった<sup>10)</sup>そして彼は文壇的論戦の愛好者とは自分を見なしておらず—主観的には確かにその通りだった—、彼もかつて述べたように、論戦がむしろ避けられることを望んでいた<sup>11)</sup>しかし、「フリージア人ハ歌ハズ (Frisia non cantat)」という〔タキトゥスの〕古い言葉をまさに典型的な形で立証するかのような、彼の全く無愛想で、妥協を好まない、そしておそらくユーモアのない性格<sup>12)</sup> 検事のような議論の仕方での、そして歴史の法廷に過去の人物を立たせる彼の同郷人クリスティアン・フリードリヒ・シュロッサーのスタイルでの、彼の方法、これらは彼を文章の上での死闘に巻き込まずにはおかなかった。結局のところ、彼もそのことを自覚していた。例えば 1875 年にヨハンネス・ヤンセン宛の書簡において彼は次のように考えていた。すなわち「わたしはあなたのうちに多くの現代への関連づけを見て取っている。総じてあらゆる論争のようなものは直接的には控えるのがよいのかもしれない。けれども私は間接的には論争を深く望んでいる」<sup>13)</sup> 過去の出来事をその前提から理解することは、クロップの為すべきことではなかった。むしろ彼は過去の出来事を、彼にとって一般的に有用で確固たる原理に基づいて判断した。

彼が見極めたと信じた真理への奉仕こそ、彼が繰り返し述べた目標だった。彼が確信していたのは、自分はその真理を史料のなかに見出したということだったが、彼はそうした史料をきわめて無批判に利用した。また史料の内容でさえも常に解釈によるもっぱら主観的な真理を含んでいることに彼はほとんど注意を払わず、同様に過去の全ての真理をそもそも把握できるのかという可能性について彼が疑念を持つこともほとんどなかった。結果、決然とした論考が彼の有力な文体上の手段となり、しかしまた彼はその行為に関して、もっぱら彼の認識によって規定され、この認識を凄まじい激しさで披露した<sup>14)</sup> 彼はこれによって自分の人生をみずから困難にした。

東フリースラント、レール (Leer) 出身のプロテスタント系商人の息子として、クロップは 1822 年 10 月 9 日に誕生し、1841 年から 1844 年にかけてボン、ベルリン、ゲッティンゲンで歴史学、文献学、神学を学んだ。ゲッティンゲンでクロップは高等教育試験に合格し、のち 1845 年に哲学の答案をイエーナ大学は学位論文として受理した。学生の時分にはすでに、彼はベルリンとそりが合わなかった<sup>15)</sup>

クロップは 1858 年までオスナブリュックでギムナジウム教師として働いたが、しかしこの仕事にそれほど満足していたわけではなかった。やがて彼は学術研究に魅了された。彼自身、その経緯を以下のように書き記した。「リベラルな雰囲気の中で教

育を受け成長し、私は1848年を喜びをもって迎え、この考えに沿って行動した。私の人生の転換点は、1850年に第一子の誕生と共に始まったが、それは確たる決意の後、一度に進んだのではなく、緩慢な歩みだった。私は保守的になり、歴史の詳細な研究に取り組み、まずは身近な私の故郷である東フリースラントの歴史に従事した……」<sup>16)</sup>

1854年から1855年にかけて、三巻からなるクロップの東フリースラント史が上梓され、その第三巻で彼はフリードリヒ大王を激しく攻撃したことで、東フリースラントで大反発を引き起こした。しかしこの結果、ハノーファー王ゲオルグ5世はクロップに注目することになった。さらにその1年前、クロップは匿名で『ドイツにおけるカトリック、プロテスタンティズム、良心の自由に関する研究』を公表し、これはプロテスタンティズムに対する批判的姿勢のため大きなセンセーションを巻き起こした<sup>17)</sup>間もなく人々は著者はクロップだと推定した。

クロップは東フリースラントの宗教改革期に関する自分の史料に同地の住民がルターの新たな教説に熱狂した様を見出すことができなかったという事実気づかされた。さらに、当時広く流布していたカール・アドルフ・メンツェル (Karl Adolf Menzel)<sup>18)</sup>のドイツ史における類似の指摘を頼りに、カトリック教徒の女性と結婚したクロップのうちのひとつの確信がみなぎっていた。それは、当時支配的であった歴史叙述の傾向とは異なり、プロテスタント宗派は良心の自由への要求を呼び覚ましはしなかった、というものだった。クロップも、三十年戦争は主として宗教戦争であり、グスタフ・アドルフは第一に信仰上の英雄だった、と主張した。このことはすべて、カトリック教会に対する極めて肯定的な発言と相まって、<sup>19)</sup>当時ひんしゅくを買わずにはおかなかった。

1859年に、クロップはハノーファーでフリーの作家として生活していたが、またもや匿名で彼の著作『ドイツ国は再びカトリックになるか?』<sup>20)</sup>が登場した。続いて翌年、クロップに小ドイツ主義の歴史家の側からの激しい攻撃にさらし、彼を大ドイツ主義者として決定的に確立することとなった著書、つまりフリードリヒ大王との決着の書、『プロイセン王フリードリヒ2世とドイツ国民<sup>21)</sup>』が登場した。これは、プロイセンが1859年の戦争〔第2次イタリア統一戦争〕に介入しなかったことへの彼の激昂から生み出されたものである。ついに1861年、ティリーに関する彼の二巻本の著作が登場したとき、本作品は、当時「マーグデブルクの放火犯」と人々が好んで

呼んでいたこのバイエルンの将軍をあらゆる非難から解放しただけでなく、むしろこの将軍に高い人間性を証明した<sup>22)</sup> – これは今日では広く受け入れている見解だが – 彼はこれで決定的に「評判の芳しくないクロップ<sup>23)</sup>」となった。すでにその前に次のようなうわさが広められており、それは、クロップがまもなくカトリックに改宗するあるいは、それどころか秘密裏にカトリックになった、というものだった<sup>24)</sup>

同じく 1861 年に登場した論考シリーズ『小ドイツ主義歴史観の創設者たち<sup>25)</sup>』と 1862 年に今では公開出版されたパンフレット『ゴータ流ドイツ史観……<sup>26)</sup>』によって、彼の小ドイツ主義歴史家たちへの批判は全面的に形成された。ここには、彼が、プロイセンのドイツの使命という教説に反対して繰り出さねばならなかったあらゆる議論が、すでに完全な形で形成されているのが見て取れる。彼はそうした議論をこの後の、1903 年の彼の死に至るまでの年月、多くの論文と評論において繰り返し書き記し、手紙においてはしばしばいっそう激しく提起し、そしてそれらを基盤に彼の歴史作品の傾向が作られていた。冷静に主張されるべきは、クロップの政治的信条は 1862 年にはすでに完全に存在していた、ということである。1866 年の敗北者の側に – そしてこのグループでもアウトサイダーとして言及しようと試みられるが – 彼を追いやった事件は、彼にとって、単に彼がすでに獲得していた見解を確認したに過ぎなかったのである。

かくして彼の人生行路と人格構造を通じて、クロップは 1862 年には上記で特徴づけた政治的姿勢を採るようになった。彼の人生の残りについても、人生行路と著作は分かたれるべきではなく、作品についても、人生行路に関して決定的に重要だったことが当てはまる。クロップは 1815 年以降のハノーファーによる支配を引き立て役としてプロイセンの東フリースラント史に對置したが、この東フリースラント史第三巻でのフリードリヒ大王批判によって、ゲオルグ 5 世はこの若い著者に注目することになった。ゲオルグ 5 世は、東フリースラントの等族が拒んだ本書への報酬金を当時支払い、これによってクロップは金銭上の多大な困窮から解放された。そしてゲオルグ 5 世は、1859 年にゲッティンゲンで歴史学教授として招聘されるというクロップの試みが不首尾に終わったのち<sup>27)</sup> 1861 年に、ライブニッツ著作集の編纂事業へ招聘し、これによってクロップの人生はきちんと整えられた路線へと乗ることになった。それというのも、クロップのフリーの作家として生きていくという試みは失敗したからであり、彼はそのようにして家族を養うことができなかったからである。1865 年

にクロップはついに、「ハノーファー王室公文書評議官・調査官<sup>28)</sup>」に任命され、ハノーファーの官吏という軌道に乗った。クロップはこれにより、實際上、ハノーファーの公文書全般の主任となった。

1866年のカタストロフィーの際、クロップはハノーファー王の随員にとどまり、ランゲンザルツァ戦〔ハノーファー軍はプロイセン軍に降伏し、王家は亡命－梶原〕の前に勇敢な個人出撃で命の危険を伴うミッションを遂行した－彼は敵の戦線を通してパンベルクへ旅行し、そこでハノーファー人の迅速な救援のためにバイエルン軍指導部につけあったが無駄だった－。このカタストロフィーによってさしあたり彼は不安定な状況に逆戻りした。というのも、プロイセン領になったハノーファーへの帰還を彼は拒否したからである。そして、レオ・トゥン男爵（Graf Leo Thun）の助けにより保守－カトリック系新聞『祖国（*Vaterland*）』の編集長になるという試みは、クロップの外交上の急進性のために失敗したが、それは、クロップがトゥンの照会、すなわちオーストリアはプロイセンとフランスの衝突の際に何をすべきか、という質問に熟考することなく次のように答えたからだった。すなわち「フランスと行動を共にする、というのもプロイセンのほうが果てしなく危険だから<sup>29)</sup>」というものだった。こうした見解によってこのベーメンの貴族は尻込みしてしまったのだが、しかしハプスブルク王国のドイツ的基本性格と、ドイツ国とのハプスブルク王国の密接な結びつきの絶対的な必要性とに関するクロップの激しい強調に、トゥンは単に共感しただけではなかった。クロップは当時、こうした思想をちょうどある論文の中で提示していたのであり、そこでは次のように記されていた。「ドイツ国との紐帯は数世紀来、オーストリアの存立の赤い糸をなしている。もしこの糸を真二つに切断すれば、衰退した牽引力が存続する限り、機械的にくっついている個々の諸邦がなお存在する－そのとき、古い歴史書に記載された、有機的に自己形成を続けたようなオーストリアはもはや存在しない<sup>30)</sup>」。

ゲオルグ5世は結局、クロップをライプニッツの編集者にして、「枢密顧問官」の称号をもった、ヴェルフ家にまつわる事柄の出版代理人にとどめた。1878年の国王死去ののち、その息子、エルンスト・アウグスト・フォン・カンバーランド大公（Herzog Ernst August von Cumberland）がクロップをこの地位のままで引き受けた。クロップはウィーンをもちや去らなかった。彼はまずヒーツィンクで、1872年からはペンツィンクの自分の家で生活した<sup>31)</sup>。プロイセンが彼にハノーファーの文書館への

立ち入りを拒否したので、ライプニッツ著作集は行き詰まった<sup>32)</sup>ゲオルグ5世がクロップをライプニッツ著作集の受諾に際して与えられた誓約から解放したのち、1873年に結局、改宗が行われた。

ウィーンで、クロップの第二の主著『スチュアート家の没落<sup>33)</sup>』が誕生し、これは14巻からなる、十全に史料を基盤にした叙述である。もっとも、今度は、主としてウィーンとロンドンの文書館だけを利用することができた。それはハノーファーとプロイセンの文書館が彼には引き続き閉ざされ続けたからである。この史料状況の一方性によって明らかに、彼の特徴をなすいずれにせよ狭い視野はなお狭くなり、そしてこうした膨大な文書量を片付けるに際してほとんど避けがたい読解ミスや見落としによって、彼の敵対者に、議論のいかがわしさ、意図的に粗悪化された史料選択を示してしまった<sup>34)</sup>

彼に投げかけられた批判は次のようなものである。すなわち、すべての作品が第一に1866年の出来事の産物であり、そして1866年のヴェルフ家のいわれのない王位喪失の悲劇をそれだけいっそうはっきりと見えるようにするという目的のために、18世紀末のヴェルフ家は意志に反して「奇妙な情勢」の圧力の下でイギリス王位についたが、その際、正統で、神聖な相続権を尊重して、ヴェルフ家はむしろドイツの小君主であり続けることを好んだ、とされるが、クロップが望んだのは18世紀末のヴェルフ家の高潔な姿勢を練り上げることだったのだ、と<sup>35)</sup>こうした非難は、クロップの真理探究が主観的には議論の余地がない以上、間違いなく的外れであるが、しかしその時代のスタイルには合致していた<sup>36)</sup>クロップ自身、彼の論争的な発言において、時折は内密の発言において、必ずしも上品ぶっていたわけではなかった。1874年12月6日のヨハネス・ヤンセン宛書簡には、ここで言及したあらゆる側面が特徴的な形で現れている。「……次のような自立した歴史作品が生み出されなければならない。すなわち、本当に歴史的な見解の支柱として、それゆえ単に学術的な作品でなく、読んでわかる形での学術的作業に資する、そうした作品である。批評でも論争でも、われわれには明解な構成ほど必要なものはない。……この人たちは他に何も持っていないので、プロイセンの書籍に飛びつき、無条件にランケを、すなわちあらゆるプロイセンの嘘つきの中でも最も危険な人物を、信用するような心根のよいオーストリア人が存在するのだ。カトリック的世界観の精神がみなぎって読みやすい歴史の作品が見当たらない<sup>37)</sup>」。



もっとも、クロップのかさばって冗長な作品もまた読みやすくなかったし、本の持ち主は膨大な、重箱の隅をつつくような細かい叙述で打ちのめされた。しかしそれはなお今日、その時代の歴史にとって宝庫である。1892年に登場した1683年のウィーン包囲に関連する著作で、クロップはウィーン人の激しい怒りを買ったが、それはウィーン市民の防衛に関する貢献についてその価値を疑問視したからであり、当時のウィーン人をそれどころか降伏意志のゆえに批判したからである<sup>38)</sup>しかしこの作品は、また彼によって公表されたマルコ・ダヴィアーノとレオポルト1世との往復書簡<sup>39)</sup>と共に一単にこの皇帝の手紙を読もうとした人でも、誰もが本作品がいかに凄まじい業績であるのか、ということを知る一彼の学術的活動の頂点をなしている。クロップは1891年から1896年の時代に彼の『ティリー』の第二版をタイトルを変更して発表し<sup>40)</sup>多くの論文と記事を出版した。にもかかわらず、彼は、1903年に孤独のうちに死亡したときには、過ぎ去った時代の人間であった。広範な読者層にふさわしい素晴らしい学術的な著作を彼は夢見たけれども、それを書き記すことはできなかった。しかし、今日、われわれがカール5世、ティリー、フェルディナンド2世、レオポルト1世をクロップの同時代人とは異なった風に見て、ハプスブルク家とその業績を総じてより高く評価するとき、モーリッツ・フォン・ザクセンとグスタフ・アドルフを19世紀の大抵の歴史家たちよりも批判的に考察する場合、1683年のトルコ戦に対するマルコ・ダヴィアーノの意義がわれわれにはまさに自明として感じられるとき、われわれはこれらのことを、彼の時代においてかくも大いに誹謗中傷されたこの人物から生み出された研究と研究上の対立に負っているのである<sup>41)</sup>

クロップの人生の考察から明らかになったのは、プロイセンに対する反感、そして1862年には彼がすでに「小ドイツ主義者の歴史観の創設者たち<sup>42)</sup>」と呼んでいたプロイセン史学の普及者たちに対する反感が、すでにこの時点で完全に示されていた、ということである。したがって彼のさらなる人生行路、彼が取り返しがつかないと感じていたドイツ政治の経過、そして何よりも1871年のドイツ帝国創設、これらは彼を、この点で一層強固に、そして著しく炯眼な見解へと導きはしたが、すでに彼は1866年に以下のように考えていた。「中欧(Mitteuropa)における本来の大国がオーストリアかあるいはプロイセンか、というのは大きな違いがある。オーストリアは防衛権力であり、プロイセンは侵略の産物である。この強奪原則によってプロイセンは成立し、成長した。外国の所有地へのプロイセンの貪欲さは決して満たされず、むし

る増大し、プロイセンはますます多くを手中に収めた。……プロイセンのもとで統一されたドイツ国はその本質を変える。ドイツ国は攻撃的になる<sup>43)</sup>」。

きわめて早い時期に、すでにクロップはヤンセンへの手紙において、彼の時代におけるドイツ内対立の宗派的側面を強調し、結果、彼の考えでは「小ドイツ主義ないしフリードリヒ主義がプロテスタンティズムと一致するわけではないが、しかし、フリードリヒ2世がみずから宗教戦争を説いたのと同じように、小ドイツ主義はドイツ人の宗派上の亀裂を同時に政治的なそれにしようとすることに狙いを定めたのだ……<sup>44)</sup>」。

ホイサー、ドロイゼン、ジーベルとの対立の個々の事例において、クロップにとって重要なのは、「いくつかのまさに異様な過ちを強調すること」—これはとりわけホイサーに対して—そして、とりわけ、小ドイツ主義的傾向を浮き彫りにすることである。つまり本質的に、彼の批判はイデオロギーの批判、それゆえ解釈の批判であり、事実在即して行われた批判はほんのわずかな場合にすぎない。事実在即した批判を彼が用いたのは、とりわけルートヴィヒ・ホイサーの著作『フリードリヒ大王の死からドイツ連邦の創設までのドイツ史 (*Deutsche Geschichte vom Tode Friedrichs des Großen bis zur Gründung des deutschen Bundes*)』についてであった。その第二版は全4巻で1858年にベルリンで出版された。もっともクロップの事実在即した批判に、とりわけ説得力があるわけではなかった<sup>45)</sup>

しかし、小ドイツ主義的傾向に対する彼の批判はそれとは異なっている。彼は例えば、ホイサーがその叙述で追及している意図について「その目的は是が非でもオーストリアに対する不信感を募らせることである<sup>46)</sup>」と考えた。フリードリヒ〔大王〕のフランスとの同盟政策については、クロップは以下の言葉で攻撃している。「これは、いわゆるフリードリヒ大王の王国が作られるに際しての烙印であり、ゴータ流の作品が長らく覆い隠そうと努めた烙印であり、この烙印を多くの真理の声に対して……覆い隠すことはもはやできない。その労苦は無駄な骨折りであり、せいぜい擦り剥けたアザを明るみに出す。シュレーゲン征服の時代より、そのあらゆる悲惨、そのあらゆる国民的な力の麻痺を伴うドイツ国における政治的二元主義が始まる<sup>47)</sup>」。かくしてクロップにとって、フリードリヒ大王とそのプロイセンに、疑問の余地なく、その時代を呑み込んだドイツ内部の対立について責任がある。彼の考えるところ、プロイセンは「大国願望 (*die Wünsche der Großmächtelei*)」を断念し、ドイツ国の現在の政

治的状况を維持すべく努めなければならない。「そうした一步がまた、ゴータ化された歴史叙述から根と基盤を根絶するだろう。というのも、この基盤はオーストリアに対する不信だからである。われわれは一連のホイサー氏の思想について、是が非でもフリードリヒ主義の美化という目的のためにこうした不信を惹起するというのが同氏の著作の主要傾向である、ということを証明した<sup>48)</sup>」。この文章で、クロップのルートヴィヒ・ホイサーへの批判は頂点に達している。

同じようなやり方で、そしてより一層もっぱらイデオロギー批判にとらわれているのが、クロップのドロイゼンに対する攻撃である。ドロイゼンはプロイセンのドイツ国統一への意思決定を中世後期にまでさかのぼって証明しようと欲していたのだが、クロップはとりわけ、ドロイゼンの誇張した、歴史の実際の展開をひどく暴力的に捻じ曲げているテーゼに対して遠慮のない、ときおり粗野な批判をくらわせた<sup>49)</sup>

クロップはハインリッヒ・フォン・ジーベルを自分の主たる敵であると見なしていた。1789年から1795年の革命期の歴史について、ジーベルによる最初の三巻はすでに発表されていたが、この三巻は確信的に大ドイツ主義者とオーストリアの支持者とにとりわけ挑戦するものだった。ジーベルに対しても、クロップは第一に、彼の考えでは偏向している叙述を批判し、－そしてこれをしかるべく行つた！－その際、彼はジーベルの事実に関する誤謬を、間違つた解釈の兆しとして証明することに腐心した<sup>50)</sup>とくにクロップの怒りを買つたのは、道徳律がプロイセンの進歩を妨げるやいなや、ジーベルが道徳律から離反したことである－少なくとも彼はそう感じ取っていた－。「以下のジーベル氏の言葉は驚くべきものである。すなわち、『元首が自らに委ねられた国家を犠牲にしても道徳感覚の喜びに浸るならば、元首は自らの義務に背いているという感情に、国王は愚直に、熱心に身をささげた。』……これがジーベル氏の政治道徳なのか？ やはり、君主が道徳感覚を略奪戦争よりも優先させる場合には君主は自分の義務に背いているという文章を彼自身は一般的に述べようとした、と想定したとしたら、けだし、それは彼について間違つた判断をしたことになるだろう。ジーベル氏はいざフランスの領土のことを考察する段になると、彼は正義と不正を同じものとして捉える。彼の非難はもっぱらプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世にしか当てはまらない。フリードリヒ・ヴィルヘルム2世は、ある小ドイツ主義者の教授の判断によれば、チャンスが与えられた場所を征服しなかったとき、自身の義務に反したのである<sup>51)</sup>」。クロップは、これら小ドイツ主義の教授たちについて、

彼らがプロイセン-オーストリアの対立を「自然なもの（naturgemäß）」と見なし、何百年以上にも及ぶものとして叙述している、と非難した。その際彼が思うに、それは、フリードリヒ2世が「ホーエンツォレルン家の300年の忠誠の伝統」を打ちこわし、ドイツ分裂の流血の種をまくことになって以来」、ただか50年のことである。

とりわけポーランド分割政策をクロップは激しく非難し、そして何にもましてもちろんジーベルの解釈を批判する。彼は次のように考えている：「……当時のプロイセンの政策が外国資産を欲求したことが、以後の時代のあらゆる不幸の源泉である<sup>52)</sup>」。またバーゼルの講和の政策は、クロップにとって、この状況から説明されうる。彼はここでも、プロイセンのとどめようのない拡張力に存在する危険を努めて指摘している<sup>53)</sup>。

総じて、クロップの小ドイツ主義者への批判は、その著者の鋭い洞察にもかかわらず、事実上の修正を意図した批判というよりは－彼は間違いや過失をほとんど指摘しない－むしろ、彼の意見では誤った傾向に対する戦いであった。彼のいう批判とは、正反対の政治的基本姿勢の表明であった。しかし、その批判は何よりもイデオロギー批判であり、そのようなものとしては、彼の批判はきわめて洞察力があり、よく基礎づけられていた。彼の批判がほとんど聞き入れてもらえなかったという事実も、こうした説明に何ら変更を迫るものではない。

オンノー・クロップ、彼の時代の支配的な傾向に対する勇気あるその戦いにわれわれはここで取り組んだが、彼はその構想について自分の生きた時代においては失敗した。すでに早くに、全方位から攻撃されるアウトサイダーの状態に追いやられていた。彼の客観性の欠如、彼の熱しやすい姿勢によって、敵は一見彼を容易に打倒したかに思われた。しかしクロップの歴史思想は、同時代人には認識できなかった深みに分け入っていた。道徳（sittlich）規範と権力思考に優位した価値基準とを彼が順守したことは、彼をその敵対者の多く以上に崇高な者とした。彼だけが、19世紀にはもはや未来がなかった理念、すなわち、超民族的で宗派的に寛容なライヒの理念のために戦った。クロップの連邦制的イメージは、彼の同時代人の間ではすでにまったく聞き入れられなかった。当時流布していた国民思想（Nationalgedanken）はその爆発力がますます重大な結果をもたらすことが明らかになっていたが、その力の前に超民族的連邦として構想されたハプスブルク家のライヒ同様、彼の理念は砕け散った。それゆえ、彼は敗者側の偉大な代表者であり続けなければならなかったのである。

**\*付記：**本翻訳は、平成 26～28 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「保守政党の国際比較」(研究課題番号：26380168；研究代表者：阪野智一)、ならびに平成 26～28 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「移民・外国人の包摂と排除に対する「国民意識構造」に関する国制史的考察」(研究課題番号：26380172；研究代表者：梶原克彦)による研究成果の一部である。

## 注

- 1) とくに、ゲオルグ・シュナート (Georg Schnath) によるオンノー・クロップ (1822 年～1903 年) に関する記述 (*Neue Deutsche Biographie* 12, 1980, S. 115-116, 所収) を参照。その他には以下がある。Heinrich Ritter von Srbik, *Geist und Geschichte vom deutschen Humanismus bis zur Gegenwart*, Bd. 2, München/Salzburg, 1951, S. 71-73. Taras von Borodajkewycz, *Leo Thun und Onno Klopp. Ein Gespräch nach Königgrätz um Österreichs Wesen und Zukunft*, in: *Gesamtdeutsche Vergangenheit. Festgabe für Ritter Heinrich von Srbik zum 60. Geburtstag*, München, 1938, S. 319-334. Ernst Laslowski, *Zur Entwicklungsgeschichte Onno Klopps. Ein Beitrag zum Problem Persönlichkeit und Geschichtsauffassung*, in: *Historisches Jahrbuch* 56. Band (1936), S. 481-498. H. Reimers, *Zum Gedächtnis Onno Klopps*, in: *Bll. d. Vereins für Heimatschutz und Heimatgeschichte* Nr. 6, Leer in Ostfriesland 1926. Gisbert Beyerhaus, *Ein Mitarbeiter an Janssens Geschichte des deutschen Volkes*, in: *Historische Zeitschrift* 132 (1925), S. 465-470. Ludwig von Pastor, *Briefe von Onno Klopp an Johannes Janssen*, in: *Hochland* 16 (1918/19) S. 229-253; 385-405; 484-511 und 578-607. 本論文の 231-238 ページにかけて、わずかに自伝的記述がある。Wilhelm Rothert, Zimmermann, Meding und Klopp, in: *Allgemeine Hannoversche Biographie. Hannoversche Männer und Frauen seit 1866*, Bd. 1, Hannover 1912, S. 175-186. クロップに関する唯一の伝記は、彼の子息ウィアールト・フォン・クロップ (Wiard von Klopp) の *Onno Klopp. Ein Lebensbild*, in: *Emdener Jahrbuch* 16 (1907) S. 1-181, であり、これは同年, *Onno Klopp*, Osnabrück, 1907 として上梓された。この増補版としてフランツ・シュナーベル (Franz Schnabel) が一残念ながらその際、彼は編集上の改変については明示していないが *Onno Klopp. Leben und Wirken. Dargestellt von Wiard von Klopp. Herausgegeben von Franz Schnabel*, の書名で 1950 年にミュンヘンで出版した。本書ではクロップの生涯が広い歴史上の文脈に位置づけられている。同時代人の追悼文のうち、大部の論文 (匿名) in: *Historisch-politische Blätter* 132 (1903) S. 599-614, のみ挙げておく。
- 2) 「彼の『史料をして語らしめる』手法が、ヤンセン同様、乏しいものだとしても、とりわけ、三十年戦争とルイ 14 世の時代、皇帝レオポルト 1 世の人格、ライヒに対するハプスブルク家の歴史上の立場、これらを解明したその業績は偉大である」とするハインリッヒ・フォン・スルビクの評価 (in: *Geist und Geschichte*, Bd. 2, S. 73) は全くもって的確である。Vgl. 近年ではアントン・シンドリンク (Anton Schindling) が自身の講演 (*Stadt und*

*Stift Osnabrück zwischen Mittelalter und Moderne*, in: *Jahres- und Tagungsbericht der Görresgesellschaft* 1985, Köln, 1986, S. 21) で評価を下した。本講演ではクロップをオスナブリュックの「偉大な伝統である地域的な帝国史叙述」に位置づけており、この帝国史叙述は、「ユストゥス・メーザー (Justus Möser), ヨハン・カール・ベルトラム・ステューヴェ (Johann Carl Bertram Stüve), オンノー・クロップ, ヘルマン・ロテールト (Hermann Rothert), ヘルマン・ホーベルク (Hermann Hoberg) と結び付けられる」ものである。

- 3) 註の1を参照。これまで9分冊出版されているハンス・ウルリッヒ・ヴェーラー (Hans Ulrich Wehler) の叢書『ドイツの歴史家 (*Deutsche Historiker*)』(ゲッティンゲン, 1971年~1992年) [邦訳, H.-U. ヴェーラー編, ドイツ現代史研究会訳『ドイツの歴史家』未来社, 1982年~1985年] もクロップに関する叙述はほとんどなく、同様にゲオルグ・G・イッガース (Georg G. Iggers) 『ドイツの歴史学 (*Deutsche Geschichtswissenschaft*)』(ミュンヘン, 初版1971年, 以後重版多数) においてもクロップの名前はまず言及されておらず、なおこの点でクロップはヨハネス・ヤンセンとルードヴィヒ・フォン・パストールと命運を共にしているに違いない! DDRの歴史家ゴットフリート・コッホ (Gottfried Koch) の *Der Streit zwischen Sybel und Ficker*, in: Joachim Streisand (Hg.), *Die deutsche Geschichtswissenschaft vom Beginn des 19. Jahrhunderts bis zur Reichseinigung von oben*, Berlin (Ost), 1963, では328~329ページ及び註45においては少なくともジーベルの批判者の一人として言及されている。
- 4) F. Schnabel, *Onno Klopp*, S. VIII.
- 5) Lothar Gall, *Bismarck. Der weiße Revolutionär*, Berlin, 1980, <sup>4</sup>1980 [邦訳, ロタール・ガル, 大内宏一訳『ビスマルクー白色革命家ー』創文社, 1988年].
- 6) Otto Pflanze, *Bismarck and the Development of Germany. The Period of Unification 1815-1871*, Princeton Univ. Press, 1963.
- 7) Ernst Engelberg, *Bismarck. Urpreuße und Reichsgründer*, Berlin, 1985.
- 8) ルードヴィヒ・ホイサー (Ludwig Häßer 1818-1867) についてはとくに、研究を進めていく上で役立つ文献リストもついている, Peter Fuchs in: *Pfälzer Lebensbilder* Bd. 2, Speyer, 1970, を参照。ジーベル (1817-1895) については, さしあたり, Volker Dotterweich, *Heinrich von Sybel: Geschichtswissenschaft in politischer Absicht (1817-1861)*, Göttingen 1978, 並びに以下の有益な伝記, Helmut Seier, *Heinrich von Sybel (1817-1895)*, in: Hans Ulrich Wehler (Hg.), *Deutscher Historiker* Bd. 2, Göttingen, 1971, S. 24-38, を参照。ヨハン・グスタフ・ドロイゼンについては, Jörn Rüsen, *Johann Gustav Droysen*, in: Hans Ulrich Wehler (Hg.), *Deutscher Historiker* Bd. 2, および本文献にある先行研究を参照。ヨハン・カスパール・ブルンチュリ (Johann Caspar Bluntschli 1808-1881) については, Dietrich Schindler, *Bluntschli*, in: *Staatslexikon der Görresgesellschaft*, Bd. 1, Freiburg / Basel / Wien, <sup>7</sup>1985, Sp. 839-841, を参照。
- 9) F. Schnabel, Onno Klopp, は46ページでクロップの『プロイセン王フリードリヒ2世とドイツ国民』(*Der König Friedrich II. und die deutsche Nation*, Schaffhausen, 1860) に関して

次の叙述を引用している。「……学術的・歴史的著作としてのみ、これらを考察したわけではなかった」。

- 10) L. v. Pastor, *Brief von Onno Klopp an Johannes Janssen* で再現された自叙伝的描写のなかで (233 ページ) 次のように言及されている。「これらの研究の本当の欠陥は、研究を通じて何もプラスなものが生み出されていないということである。これに対して、私はこれを目標としていた」。
- 11) F. Schnabel, *Onno Klopp*, S. 54-55 におけるウィアールト・フォン・クロップの見解による。L. v. Pastor, *Onno Klopps Briefe an Johannes Janssen*, S. 506, におけるヤンセンに宛てたクロップの書面での見解も参照。
- 12) Vgl. E. Laslowski, *Zur Entwicklungsgeschichte Onno Klopps*, S. 482 ff., bes. 483-484.
- 13) L. v. Pastor, *Briefe von Onno Klopp an Johannes Janssen*, S. 492 (強調は筆者)。同時代にあって、クロップ同様、すこぶる評価の分かれたフランクフルトの宗教改革史家ヨハネス・ヤンセンについては, Wilhelm Baum, *Johannes Janssen (1829-1891). Persönlichkeit, Leben und Werke*, Innsbruck, 1971, 並びに ders., *Johannes Janssen und Ignaz von Döllinger*, in: *Historisches Jahrbuch* 95 Bd., 1975, S. 408-417 (研究を進めていく上で助けとなる文献リストあり) を参照。また *Ludwig Freiherr von Pastor 1854-1928. Tagebücher – Briefe – Erinnerungen*, hg. V. Wilhelm Wühr, Heidelberg, 1950, に所収の、若きルートヴィヒ・パストールに宛てた 1877 年 6 月 16 日のクロップの手紙も参照。「6 月 14 日付の貴君の親愛なる手紙に感謝申し上げます。ですが、ランケの敵として行動することを貴君に期待した訳では全くありませんでした。わたしの希望はひとえに、もし貴君がそもそもテーマそれ自体に向いていると自ら思われるのであれば、貴台がことによるとランケと事を構えることになるかもしれないからと言って、それをやめてしまうことがないように、というものでした。そもそもわたしはどんな類の論戦よりも、むしろ建設的な統合のことを考えています。あちら側に、自分たちが通用しないということを納得させることはなかなかできそうもありません。しかしわれわれは教えを求める人々のために仕事をしているのです。そうした人々にとっては、何某のベルリン大学教授が間違ったとか嘘をついたという証明はほとんど重要ではなく、彼らにもたらされるものが真理に適っていることの証明が重要なのです。ランケが真理を望んでいないことは、貴君からわたしが譲り受けた彼の『ローマ教皇』に関する作品の二冊から、また明らかになりました。ランケからいつも感じ取れるのは、嘘という非難に直接身をさらすことなしに、どれだけ自分が進んでよいのか、と彼が考えているということです。そのすべての作品には文化闘争の精神がみなぎっています。しかしわたしは、以前にもあなたに申しました通り、あなたが齒に衣着せずランケに対して書く、すなわち反ランケと呼ばれるような作品をずっと望んでいます。それというのも、これによって貴君ならば、彼の信奉者連中に、少なくともあなたがそれを成し遂げる限り、それを一時にやめる口実を与えることになるからです！ これに関してあともう一点ございます。もしあなたがある人物について好意的にあるいは敵対的に把握して、ある仕事がお互いあるいは目的に適っていると客観的な理由から考える場合は、どうぞそ



のようになさってください」(ibid., S. 107-108)。ここにクロップのすべてがある！

- 14) これについてはスルビクの以下の見解を参照。「だが疑いえないのは、この性格のはっきりとした人物が無条件のプロイセン反対者で改宗者となったその原因が痛切なまでの真理への意志だったこと、そして彼が強固な倫理的な法概念と激しい民族意識(Nationalsinn)を内に秘めており、成功の観点から判断することを拒否したことである。」H. R. v. Srbik, *Geist und Geschichte*, Bd. 2, S. 37. 同様に, L. v. Pastor, *Briefe von Onno Klopp an Johannes Janssen*, S. 662, も参照。「彼は偉大な人物であり、鋭敏な頭脳をもっていたが、彼の功績はカトリック教徒から十分には評価されていない」。同じく, H. Reimers, *Zum Gedächtnis Onno Klopps*, S. 114 und bes. S. 118, も参照。
- 15) F. Schnabel, Onno Klopp, S. 6-7. 「……おびただしい喧噪、それがベルリンの特徴である。ベルリンはどこもかしこも不快で、それというもののベルリンの特筆すべきものは、芸術、劇場、オペラを楽しむことだが、これは、わたしにとってベルリンを好きになる魅力とはならない」。
- 16) L. v. Pastor, *Briefe von Onno Klopp an Johannes Janssen*, S. 231.
- 17) Onno Klopp, *Geschichte Ostfrieslands*, 3 Bde., Hannover, 1854-1858. Anonym, *Studien über Katholizismus, Protestantismus und Gewissensfreiheit in Deutschland*, Schaffhausen, 1857.
- 18) F. Schnabel, Onno Klopp, S. 22. ここで問題になっているのは, Karl Anton Menzel (1784-1855), *Die neue Geschichte der Deutschen von der Reformation bis zur Bundesakte*, 12 Bde., Breslau, 1826-1848, である。メンツェルについては, H. R. v. Srbik, *Geist und Geschichte*, Bd. 1, S. 226. さらに, 文献リストのある, *Schlesische Lebensbilder* 2, 1926, S. 173-183, を見よ。
- 19) F. Schnabel, Onno Klopp, S. 23-24.
- 20) *Wird Deutschland wieder katholisch werden? Von dem Verf. der Studien über Katholizismus, Protestantismus und Gewissensfreiheit in Deutschland*, Schaffhausen, 1857.
- 21) Onno Klopp, *Der König Friedrich II. von Preußen und die deutsche Nation*, Schaffhausen, 1860. クロップがこれによって追求した意図については, 本稿の註9を参照。ブルクハルトの伝記作家であるヴェルナー・ケーギが指摘したように, なんといってもヤーコプ・ブルクハルトほど自分のフリードリヒ大王に対する評価をクロップの著作に強く依拠した人は少なかった。Vgl. Werner Kaegi, *Jacob Burckhardt. Eine Biographie*, Bd. 5: *Das neue Europa und das Erlebnis der Gegenwart*, Basel/Stuttgart, 1973, S. 235 ff. もっともクロップはこの作品を「1866年の敗北に対する燃えるような怒りのなかで」(ebd.) 生み出したわけではなかった。George Peabody Gooch, *Friedrich der Große. Herrscher – Schriftsteller – Mensch*, Göttingen, 1951, S. 379-384, では, 379ページで同様にこの作品を1866年に出現させているが, 同書の見解のクロップに対する批評は全般的な外れである。Theodor Schider, *Friedrich der Grosse. Ein Königtum der Widersprüche*, Berlin/Wien, S. 486-487, は, シュレーゲン征服が無法な行為だと確かに認めつつも, プロイセン国家にまた「理念上の構成部分」を認めることで, クロップのテーゼを穏当なかたちで批判的に検討している。



- 22) Onno Klopp, *Tilly im 30-jährigen Krieg*, 2 Bde., Stuttgart 1861. ティリーの今日の評価については文献リストを備えた, Marcus Silvester Junkelmann, *Feldherr Maximilians: Johann Tserclaes Graf von Tilly*, in: Hubert Glaser (Hg.), *Um Glauben und Reich. Kurfürst Maximilian I. Beiträge zur bayerischen Geschichte und Kunst 1573-1657*, Bd. 1, München und Zürich, 1980, S. 377-399, を参照。
- 23) L. v. Pastor, *Briefe von Onno Klopp an Johannes Janssen*, S. 391. *An Janssen, Hannover den 14. April 1863*.
- 24) E. Lasowski, *Zur Entwicklungsgeschichte Onno Klopps*, S. 495.
- 25) *Historisch-politische Blätter* Bd. 48, 1861, S. 30-51, 214-244, 886-917, und 965-976. 1863年にクロップは本シリーズを増補し同名の本として出版した (*Kleindeutsche Geschichtsbaumeister*, Freiburg i. Br.)。
- 26) Onno Klopp, *Die gothaische Geschichtsauffassung der deutschen Geschichte und der National-Verein. Mit Bezeichnung auf die Schrift des Herrn Sybel: Die Deutsche Nation und das Kaisertum*, Hannover, 1862.
- 27) F. Schnabel, *Onno Klopp*, S. 38 ff.
- 28) Ebd., S. 61.
- 29) T. v. Borodajkewycz, *Leo Thun und Onno Klopp*, S. 327.
- 30) Ebd., S. 325-326.
- 31) F. Schnabel, *Onno Klopp*, S. 131.
- 32) *Die Werke von Leibniz gemäß seinem handschriftlichen Nachlasse in der königlichen Bibliothek zu Hannover...* 11 Bde., Hannover, 1864-1884.
- 33) Onno Klopp, *Der Fall des Hauses Stuart und die Sukzession des Hauses Hannover in Großbritannien und Irland im Zusammenhang der europäischen Angelegenheiten von 1660-1714*, 14 Bde., Wien, 1875-1888.
- 34) Otto Meinardus, *Die Succession des Hauses Hannover in England und Leibniz. Ein Beitrag zur Kritik des Dr. Onno Klopp*, Oldenburg, 1878, bes. S. 48-49; 54-55; 76. 「……クロップはまた、その傾向のために、誤った形で、ほとんど関係のない文書を引用し、纏め上げたということ」 S. 88.
- 35) Ebd., S. 76. 「クロップがこうしたヴェルフ家への偏愛傾向から、ハノーファー家の英国での継承に関する作品を書くことに着手したということは、彼が歴史的見解を怪しく捻じ曲げて故意にゆがめたということと同じくらい、上述の見解によれば、はっきりさせる必要がある」。
- 36) L. v. Pastor, *Onno Klopps Briefe an Johannes Janssen*, におけるクロップの自叙伝部分の自己言明も参照。231～232 ページ、とくに 237 ページ。「……私が最も追いかけているもの、それは歴史家として真理を語ることである」。同様に F. Schnabel, *Onno Klopp*, S. 235. 「私の使命は、歴史的諸事実の真理を見出し、表現し、しかも本質的に行動する人間たちに関して、これを行うことである。掘立柱建物の発見やギリシャ美術作品の発掘も私には

全くよそよそしいままである」。

- 37) L. v. Pastor, *Onno Klopps Briefe an Johannes Jannsen*, S. 484-485.
- 38) これについては, F. Schnabel, *Onno Klopp*, S. 162-167. さらに, L. v. Pastor, *Briefe von Onno Klopp an Johannes Jannsen*, S. 589-591.
- 39) Onno Klopp (Hg.), *Corrispondenza epistolare tra Leopoldo I. Imperatore ed il P. Marco d'Aviano Cappucino. Dai Manoscritti tratta e pubblicada*, Graz, 1888.
- 40) Onno Klopp, *Der Dreißigjährige Krieg bis zum Tode Gustav Adolfs 1632*, 3 in vier Bänden, Paderborn, 1891-1896.
- 41) F. Schnabel, *Onno Klopp*, S. 225-233.
- 42) Onno Klopp, *Kleindeutsche Geschichtsbaumeister*.
- 43) F. Schnabel, *Onno Klopp*, S. 80-81. ヤンセンが1871年の帝国建設を歓迎した時, まさにヤンセンとの関係が悪化した, ということは特徴的である。L. v. Pastor, *Onno Klopps Briefe an Johannes Jannsen*, S. 245.
- 44) ここで言及された七年戦争ならびに一般的にみたフリードリヒ大王の宗派的側面を近年強調しているのは以下の文献である。Johannes Burkardt, *Abschied vom Religionskrieg. Der Siebenjährige Krieg und die päpstliche Diplomatie*, Tübingen, 1985.
- 45) Onno Klopp, *Kleindeutsche Geschichtsbaumeister*, S. 5 ff. bes. 6-7.
- 46) Ebd., S. 8 ff.
- 47) Ebd., S. 21.
- 48) Ebd., S. 23.
- 49) Ebd., S. 149-150.
- 50) Vg. z. B. ebd. S. 156-157, S. 158 ff.
- 51) Ebd., S. 164-165.
- 52) Ebd., S. 181.
- 53) 「われわれがおよそ恐れていることは, いずれの場合もあってはならないが, プロイセン国家がこうした教授たちの意志と希望に従って導かれ, 厚かましい侵略政策がまさに一般的なカオスと一般的な荒廃という結末を迎えるだろう, ということである」(Ebd., S. 254)。